

手
仕
事
の
医
療

評
伝
石
原
寿
郎

表紙絵
市川吉明

一 転向

大通りを入ると、嘘のように静かな住宅街だった。代々木の駅からの道順を教えられたときには、代々木の街中のどこに人が静かに暮らせるようなところがあるものかと思つたのだが、山手線と中央線の大きなガードをくぐって、一筋入っただけで、そこはちょっとした山の手の住宅街だった。その昔は、大名・旗本の屋敷地だったのだろう。それが切り刻まれて、ブロック塀の住宅が連なっていた。その一画に、店先に茄子や胡瓜のザルを並べた八百屋があった。巻き上げ式のくたびれた日除けも、キャベツを載せた木箱も年季を感じさせた。いかにも古くからそこで八百屋をやっているという様子の人なつっこそりなオヤジと目があつたので、だいたい見当はついていていたが、道を尋ねてみた。

すると、その八百屋は、「ああ、あの首括くくつた先生の家だね。」

石原寿郎としろうの自死は一九六九年九月。私が石原家を訪ねたのは、二三回忌を二カ月後に控

えた一九九一年の夏である。東京帝大医学部出の医師にして歯科医専で学び直して歯科医師となり、クラウンブリッジ学（固定式補綴分野）の第一人者と言われた石原寿郎が、地元では二〇年を経てもなお「首を括った先生」として記憶されているのだ。

この日、私は石原寿郎の未亡人石原和を訪ねて、いくつかのことを確かめたかった。もちろん縁もゆかりもない者が訪ねていくわけだから、私の中には、はっきりとした意図がなければならぬ。

復員後、東京帝大医学部整形外科の副手に復職した寿郎が、半年も経たないうちに専門学校に編入し、歯科医師に転じた理由は何だったのか。古い同級生の中には、当時の東京医科歯科大学の学長だった長尾優まさよ（一九四四〜六一年東京高等歯科学学校および歯科専門学校校長、東京医科歯科大学学長）が、知己のあった寿郎の父親に頼んだのだろうと憶測するものもいた。長尾と寿郎は親戚筋にあったとか、寿郎の父親は歯科の歴史上にも知られるような人物で、寿郎が歯科を継ぐのは自然な流れだったと話す者もいたが、いずれも根拠は定かではない。父親の痕跡は、わずかに歯科雑誌の主筆であった高津弼はじめ（一九一九〜一九四〇年『中京歯科評論』、『日本口腔衛生』、一九四五〜六五年『日本歯科評論』）が「紺飛白時代の友人（1）」と書き残しているのみである。妻の和は、寿郎が歯科に転じた理由のひとつに、軍医

(1) 高津弼：鹿鳴荘だより、日本歯科評論, 249, 1963.

としての従軍体験があったのではなかったかと言う。

昭和十七年に戦時下の繰り上げで東京帝国大学を卒業し軍医となった石原は、北海道旭川の部隊に入り、旭川陸軍病院勤務となった。内地勤務の軍医のもっとも重要な職務は徴兵検査である。村々から集められた青年たちは、ふんどし禪を外し、素っ裸になって一枚の診査用紙を手持って講堂に並ぶ。素っ裸で身体検査を受けるのであるが、その列の行き着く最後に軍医が座っている。青年の差し出す診査用紙を受け取った軍医はチラッと目の前にぶら下がった外陰部に目をやって、素っ裸の青年を見上げると判を捺す。一応、梅毒の有無を検査していることだろう。

「何が甲種合格で、何が乙かって？ 筋肉がついていれば甲、背が低くて痩せて眼鏡をかけてれば乙、馬鹿みたいなもんだ。そこに医者ハンコがあればいいんだよ。それで甲の判を捺せば、合格即入営だ。入営ということは即シベリア行きだが、乙なら内地というわけだ。ひどいもんだよ。」

格別深い意味もなく和が尋ねたことに、寿郎は腹立たしげに嘆いた。シベリア行きというのは和の記憶違いで、出征先は北はソ連国境から南はニューギニアに及び、敗戦とともに南樺太の兵士がシベリア抑留になったことを嘆いていたのであろう。軍医というもの

は、同年代の農家の働き手を死地に向かわせるか否かを定めるために軍隊に配属されているようなものではないか。戦後、シベリア抑留者が背負われた過酷な運命を知って、軍隊の苦勞ひとつ知らず内地勤務の軍医として過ごしたことを自責し、自分と同年代の青年たちが戦地に赴く姿を目に浮かべた。

戦場で軍医たちに求められたのは、傷病兵の治療を短時間に済ませ、一刻も早く原隊復帰させることだった。前線の野戦病院では、治療器具や衛生材料・薬品の不足は当たり前で、医学の知識はほとんど用がない。危険な前線での応急処置は衛生兵の仕事で、戦場では軍医は衛生兵ほどにも役には立たなかった。南方の戦場では、治療の難しい兵隊（しやうこうざい）に昇汞剤（消毒薬）を静注して最期を見届けることを許可するのが仕事だったという。しかし、それを含めて、軍医の存在は兵隊たちを精神的に支えた。そういう話を聞くにつけ、寿郎は罪の意識を強くした。

寿郎は、友人の紹介で帯広の病院に看護婦として勤めていた和と見合いをして、終戦の年の三月に式を挙げた。

(2) NHK：証言記録 兵士たちの戦争「陸軍軍医の戦場」。戦争証言アーカイブス（放送日2011年8月17日）。NHK, 2011.

(3) 津山直一：『恕』—相手の心の如くになって。対談 医の心—先輩医師に学ぶ 第1集。日本医師会, p.92-97, 1995.